

- ◎遠い『記憶の絵』——森茉莉の想い出《鷹》一九八八年二月号（一九八八年二月五日）三四八
 ◎《死児》という絵《増補版》刊行（一九八八年九月二五日、筑摩書房刊）
 ☆〈人生〉愛語鈔——永田耕衣宛書簡《琴座》四四五号（一九八九年二月一日）207
 ☆青葉つうしん——永田耕衣宛書簡《琴座》四四五号（一九八九年二月一日）208
 ☆耕衣句集『人生』十七句撰《琴座》四四五号（一九八九年二月一日）209
 ☆心平断章——「H氏賞事件」ほか《現代詩読本 草野心平のるる葬送》（一九八九年三月一日、思潮社刊）211
 ☆「善人」だったあなたへ《現代詩手帖》一九八九年三月号（一九八九年三月一日）〈弔辞〉216
 ☆「ムードロップ」《白い国の詩》一九八九年四月号（一九八九年四月一日）〈言葉の泉〉218
 ☆愛語鈔——永田耕衣宛書簡《琴座》四四七号（一九八九年四月一日）219
 ☆篠田一士追想《ユリイカ》一九八九年六月号（一九八九年六月一日）〈追悼＝篠田一士〉220
 ☆姉妹——がらとべら《アスベスト館通信》一〇号（一九八九年七月二二日）224

【一九九〇年代】

- ☆日記 一九四六年 《るしおる》五号（一九九〇年一月三一日）231
 ☆〈花嫁〉を迎えることは……《現代詩文庫100 平出隆詩集》（一九九〇年五月二五日、思潮社刊）232
 ☆日記 一九四六年 《るしおる》六号（一九九〇年五月三一日）236
 ☆日歴（一九四八年・夏曆）るしおる別冊《私のうしろを犬が歩いていた——追悼・吉岡実》（一九九六年一月三〇日、書肆山田刊）〈吉岡実遺稿〉242

以上、全【一〇八→一一】篇

編者あとがき

収集家の中には、リチャードがつれづれに活字を組んで印刷した未発表の詩や散文の一部を二百数十篇集めた者が、
 少なくとも一人はいるらしい。——ジョン・ダニング著、宮脇孝雄訳《幻の特装本》（一九九七、早川書房刊）

吉岡実が一九九〇年の五月に亡くなって九年になる。その間、一九九六年に《吉岡実全詩集》が筑摩書房から刊行されて、未刊詩篇まで手軽に読めるようになったことはまことに喜ばしい。一方、散文は遺稿〈日歴（一九四八年・夏曆）が同年に発見されて追悼文集《私のうしろを犬が歩いていた》に収録されたものの、未刊の散文は今日まで一冊にまとめられていない。残念なことである。

わたしは《現代詩手帖》一九九五年二月号〈特集吉岡実再読〉に〈吉岡実未刊行散文リスト〉を発表したが、これは時間的な制約から十分な調査結果とは言いがたく、より詳しい一覧を作成する機会を切望していた。今回、未刊行散文の本文の校合と併せて、初出紙誌等も調査しなおしたので、前掲リストの不備を補えた。吉岡実の未刊行散文のほとんどは本書に収録できたのではないかと思う。「収集家」としての肩の荷が降りた気がする。

吉岡実が散文の執筆依頼を極力断わっていたが、それでも勤め先を退いてからは相当量の原稿を書いていて、主なものは《死児》という絵《増補版》の最終章で読むことができる。さてここから先は憶測でしかないのだが、一九七八年七月の筑摩書房倒産とそれに伴う一月の退職、一九八〇年頃の体調不良を機に、吉岡は新作詩篇は《夏の宴》（一九七九）として、拾遺詩篇は《ポール・クレーの食卓》（一九八〇）として、またそれまで未刊だった散文

吉岡 実 (よしおかみのる)

1919年 東京に生まれる
1934年 本所高等小学校卒業

1990年 東京で逝去

詩人・装丁家

著書 詩集《僧侶》《サフラン摘み》《薬玉》《吉岡実全詩集》他
散文《「死児」という絵》《土方巽頌》《うまやはし日記》

吉岡実未刊行散文集

文藝空間叢書 1

2013年1月31日 初版第1刷発行

著者 吉岡実
発行者 小林一郎
発行所 文藝空間

[..... (住所)]

郵便番号 [.....]

電話 [.....]

郵便振替 [.....]

印刷 [.....]

製本 [.....]

Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが、小社読者係宛に御送付ください。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

は《「死児」という絵》(一九八〇)としてまとめることで、生涯の決算とするつもりだったのではあるまいか。さいわい「悪質の病気ではなく」(自筆年譜)、それ以降、《薬玉》や《土方巽頌》に代表される作品が産み出された。近年、吉岡実の後期、すなわち一九八〇年代の詩はそれまでの詩にも増して難解だという世評である。晩年の吉岡が書物を筆頭にどのような文物を受容したか、俳句の撰も含めて、この稀有の詩人が書きのこした散文から探っていくことは、吉岡実詩読解への手掛りとなるだろう。その散文は晦渋とはほど遠いものだから、本書が読者に純粹に読む楽しみを与えてくれることはもちろんである。

書名の《吉岡実未刊行散文集》は《「死児」という絵》の初案だった《散文集》を踏まえた。参照のために本文中と初出一覧に《「死児」という絵》初版と《「死児」という絵(増補版)》刊行の項を立てたが、大きな括りとしては先に述べた理由、すなわち一九八〇年を重視する立場から、一〇年ごとの西暦を採用した。初出一覧には前掲《「死児」という絵》の二つの版(これらの初出紙誌等も調査した)と本書収録の散文のデータを発表順に掲載した。

読者は本書《吉岡実未刊行散文集》によって、《「死児」という絵》《土方巽頌》《うまやはし日記》と併せて、吉岡実の散文世界を涉獵することが可能となったのである。

吉岡実生誕八〇周年の一九九九年四月一五日 東京・練馬にて

編者 小林一郎